

前世を信じるだろうか。

ボクが前世を信じるようになったのは、自分の前世がナポレオンやクレオパトラではないと知ったからである。ましてや、釈迦牟尼やイエス・キリストではない。それどころか人間ではない。

歴史上の有名人の生まれ変わりがそうそう大勢いるわけがないのである。ヒンズー教・仏教的輪廻観から言えば、前世は動物なり虫なりである可能性が高い。

有名人だったとすれば、有名な犯罪者である。現世のこのボクの人生に前世の徳が反映されているならば。幸いにもボクが思い出した前世の記憶は、殺人や強姦の血塗られた記憶ではない。

ボクの前世の記憶は主に夜の間再生される。したがって、人はそれを夢と呼ぶ。

それが夢でないと証明する方法はない。なぜならば、歴史的記録に照合して、正確な事実であると判定することはできないからである。なにしろ歴史とは人間の記録なのだから。

夢ではなく、前世の記憶だというのはボクの影響に過ぎない。しかしボクはそれを確信していた。

腹が減っていた。

いつも腹を空かせていた。満腹になったことなどない。それは彼だけではなく、誰もが腹を空かせていた。

けれども、ここしばらくはそれまで以上に食べ物がなくっていた。柔らかい若芽はもちろん、古くて固い葉さえも食べつくされていた。

空はずっと厚い雲に覆われていた。樹木は新芽を出さず、わずかな新芽も大きな葉、若い枝には成長せずに小さく縮れたままだ。その小さな葉も、すぐに腹を空かせた草食動物に食べられるてしまうので、巨大な樹木も枯れはじめていた。彼の群れも主食となる草木を食べつくしていた。栄養不足のためか、発情期になっても雌たちのほとんどが発情しなかった。発情した雌も弱い発情でしかなく、そのかすかな匂いは、限界まで空腹になっていた雄の気を引くほど強くはなかった。

群れは食料となる草木を求めて移動を続けて

いたが、どれだけ移動しても、厚い雲の下から抜け出すことはできず、運良くわずかな草木を見つけることができた時でも、何日も食いつなぐことはできなかった。

群れはこの付近の樹木を食べ尽くしてしまったので、再びどこかに移動するべきだった。移動の欲求が群れの中に広がっていた。ただ、どの方向に移動するかという点について、各個体の気分は異なっていた。方向を最終的に決定する強い個体は存在しなかった。群れの気分を統一する強い鳴声を出せるものはいなかった。

どの個体も弱々しい鳴声で、食料となる草木のありそうな方向への移動を主張するだけであった。大きな鳴声が出せるほどの体力もなかったし、匂いも経験も食料の存在を告げていなかったから、確信ある鳴き方も出来なかった。

誰もが移動するべきだと感じていたが、自分だけ群れから離れる勇氣はなかった。群れを離れることには大きな抵抗を感じた。それは肉食動物に襲われる危険を意味した。それは繁殖の機会が減少することを意味した。

少なくとも、これまではそうだった。

彼も移動の欲求と空腹に思考と行動を支配さ

れていた。そこにもうひとつ欲求が加わった。

どこからか、発情した雌の匂いが漂ってきたのだ。その匂いは極めて微かなもので、初めはそれが発情の匂いだとはわからなかった。空腹は感じててもそれを満たすものはなく、移動の欲求は群れにとどまる欲求で相殺されている。そこで徐々に情欲だけが蓄積されていった。

意識しないままに彼は発情した雌を探し始めた。どの雌も痩せこけて子供を宿す力はないように見える。他の雄は発情した雌よりも食料を探すのに熱心だ。

彼も食料を探したかったし、あるいは食料を探しているつもりだったかも知れない。それでも彼はいつのまにか一匹の雌に近づいていた。

地面に落ちていた糞が彼の注意を引きつけた。それは健康な糞であった。その糞からは発情した雌の匂いがしていた。発情の初期の匂いのようにでもあり、最初の発情期の匂いのようにでもあった。他に発情している雌がいれば避けるべき相手といえただろう。匂いは、卵子の発達が十分ではないことを示していた。

前世の記憶の中でボクが見たものは草食恐竜の

群れのようだった。有名人でも人間でもないけれど、恐竜とはずいぶん陳腐な前世ではないか。心の中の願望を反映しているという点では、ナポレオンやキリストの生まれ変わりと主張する人と何も変わらない。

初めはそう考えたのだが、恐竜は数億年にわたって地球上で栄えていたのだから、その延べ個体数は人類の延べ個体数を越えていると思われる。そう考えると、前世が恐竜というのは、単なる願望ではなく、確率的に十分あり得ることではないか。

その上、願望なら恐竜のイメージから肉食恐竜を選びそうなものだ。一方、食物連鎖から言えば明らかに肉食恐竜よりも草食恐竜の方が数が多いだろう。その分当たる確率が高いはずだ。

つまり単なる願望の反映としての夢ではなく、前世の記憶だと考えてもよいのではないか。

また、前世の記憶を夢としてみるというのも理由のあることかも知れない。聞いたところによると、通常の夢というのはその日の記憶を短期記憶から長期記憶に移す時に見るといいう。記憶の仕方を交換する過程が夢だといふのだ。

ならば前世の記憶、それも恐竜という人間とは

かなり異なった脳を持つ生き物の記憶を、そのまま人間が記憶したように思い出せると考える方がおかしいのではないか。恐竜の記憶を再生するには一旦夢として整理しなおす必要があるのではないだろうか。

彼は発情した雌に対して求愛行動を示したが、それはなんとなく中途半端なものになった。というのも彼の求愛行動は彼女の発情臭によって誘発されたのだが、その発情臭が弱かったからである。

中途半端な求愛行動に対して、彼女は当然のようになんの反応も返さなかった。彼自身、なぜそんな行動をしてしまったのかわからなくなり、また餌を探しはじめた。

それでも彼女のそばから去りがたいものを感じて、近くをうろろしながら、餌を探していた。やはりその付近にも餌となる樹木はなく、他のところを捜そうかなと思いはじめた頃、ふと見ると、彼女がもごもごと口を動かして何か食べているではないか。

いいなあ、何を食べているんだろうと近寄ってみると、何か茶色いふわふわした塊を食べてい

る。それはそこに倒れていた大きな木の幹にくっついてあるもので、これまでも何度か目にしたことはあったが、食べてはいけないうもののような気がしていたのだ。

食べられるんだっけと思って、そのふわふわしたものに鼻を近づけてみると、嫌な臭いがする。おぼろな記憶によると、以前そんな匂いのあるものを食べて、お腹が痛くなつたような気がする。これは食べないほうがいいという強い予感がする。

けれども彼女は平気でどんどん食べていて、彼もだんだんそれが食べられるような気がしてきた。仲間の食べているものは食べても大丈夫という気もする。しばらくためらったけれど、空腹は堪え難いほどであったし、他に食べるものもないので、彼もその奇妙な物体を食べてみた。味はほとんどわからない。でも口に入れるとやはり嫌な匂いは隠せない。彼はためらいながらも少しずつ食べた。食べていいのかどうか、まだ確信が持てないのである。ただ、口を動かしているときと安心感が広がってくる。彼らの種族は口を動かして物を食べている状態が普通の状態なのである。

口を動かして食べ物咀嚼していれば幸せなのだ。

ただこれを食べていいのだろうかという不安感はなかなか消えなかった。

ボクの前世の記憶は恐竜の絶滅時のものかもしれない。

前世の記憶から恐竜絶滅の原因がわかり、それが新しい発見であって、何か証拠が出て来たりすれば、単なる夢ではなくて、本当に前世の記憶だということが証明できるだろう。

巨大な隕石が落下するところでも見られないか、あるいは、大規模な火山の噴火にでも会わないだろうか。

巨大隕石の落下の瞬間にその場所に居合わせたら、何が起こったのか分かる前に死んでしまっただろう。ちょうどよい距離にいて、ちょうど空を見ている時に、隕石が落下しなければならぬ。そんなことは確率的にありそうもない。もしそんな場面を見たとしたら、それこそ前世の記憶ではなくて、単なる夢であるという証拠になろう。

逆に、マントル・プルームの上昇による気候変

動などは、百万年以上にも渡って続く現象であるから、その時代の最中に生きている短い生涯の生物には、何が起こっているのかわからないに違いない。

結局は、単に空が曇っていて、植物が枯れていることしかわからないのだ。

そもそもボクの前世の恐竜がいつの時代に生きていたのかもわからないのである。前世の記憶である夢に出てくる恐竜は、どうもボクの脳内の恐竜に対するステレオタイプから来ているらしい。その当時の時代を生きていた恐竜にしてみれば、群れの仲間の姿形などはいちいちくつきりと記憶するようなものではないのだろう。

また、絶滅時というボクの印象も間違っているかも知れない。空が暗くなって植物が枯れるような現象は、局地的な異常気象の可能性もある。恐竜が栄えていた長い時代には、その程度の異常気象はいくらでもあったはずだからである。

今、自分の置かれている状況が局地的なものなのか、世界的な状況なのかは、我々人間ですら簡単にわからない。だいたい、テレビのニュースや新聞の解説記事を読んで、初めて世界的な異変だと知ることができるわけで、それらの情

報がなければ、あらゆる異常は局地的な異常に過ぎないのである。

それでも、何かいつもと違ったものを食べたという記憶ははっきりしていて、得体の知れないものを食べる不安感と食べ物があるという安心感の入り交じった感情は非常にリアルなものであった。

恐竜の脳にとってもそつという特殊な体験はくつきりと記憶されるものなのだろう。

彼らはいつのまにか群れからはぐれていた。彼女は群れよりも食べ物に気がなるようで、群れが移動しはじめても、まだあちこちに残っていた茶色いものを食べることに熱心だった。そして彼は彼女のそばにいたかったのだ。

あるいは彼女が群れを追いかけなかったのは彼が近くに留まっていたからかも知れない。ひとりだけで取り残される不安は大きい、誰かがそばにいれば安心できる。彼はただ彼女のそばにすることに、そして茶色いものを食べることに夢中になっていた。彼らの群れが移動したことに気づかなかった。

よつやく群れが移動してしまつたと気づいた時

も、彼女がそばにいてのんびりと食べ物を食べていたので、彼は群れを追いかけなければならぬという気がしたものの、彼女の元を離れて群れを追いかける気にはならなかった。ここを離れたら本当にひとりになってしまう。

彼は彼女のすぐそばまで近寄った。群れから離れた不安を紛らわすためであろう。彼女も彼が近づいたことで同じように安心したようだった。

群れをつくることには長所がある。群れは餌の密度に応じて大きさを変えることが出来るのだ。餌が豊富にある時は、大きな群れをつくって捕食者の攻撃に備え、餌が少なくなったら小さな群れにして飢えを凌ぐ。

群れの大きさを調節するような行動が特別になかったとしても、餌の量だけで群れの大きさは自動的に調節されるだろう。しかし、動物によつては餌の量に応じて群れを分割するような行動を発達させていたとしてもおかしくはない。

もちろん群れが小さくなると、捕食者に襲われやすくなるだろうし、群れの中での繁殖が繰り返されれば、遺伝的多様性も減少するだろう。しかし、捕食者が群れ全員を食べ尽くすような

ことはないはずだ。食料の確保の方がより重要だろう。

ボクの前世の恐竜が、食料の減少に伴う遺伝子の働きによって、群れから離れたのか、それとも、単に雌に引きつけられて偶然群れから離れてしまったのか、それはわからない。そういうことを調べるにはやはり一頭だけの観察では情報が不足するのだ。

もつともそんなことを考えてみたところで、あまり意味はない。ボクが前世の記憶から、恐竜の行動にしろ、絶滅の原因にしろ何かを発見したとしても、それを発表するわけにはいかないからだ。発表しても、前世の記憶ではまともに取り扱ってもらえない。

彼はどうしても気になってしかたがない。彼女の落とした糞に鼻を近づけて匂いを嗅ぐ。やはり発情臭がしている。彼女のお尻の臭いを嗅ぐうとしても、彼女は尻尾を振って彼を近づけてくれないので、はつきりと臭いを嗅ぐことができない。一方、彼女の糞はいくら臭いを嗅いでも追い払われることがない。

糞の臭いを嗅いでいるうちに彼は発情してき

て、求愛行動をしたくなってきたが、糞に対して求愛行動しようとして、やはり何か違うと気づき、途中でやめることになった。

それでも気になる彼女の糞に鼻を近づけて臭いを嗅いでいるうちに、ふとなつかしいような前にもそれを食べたことがあるような気分になって、彼はそれを口に入れて飲み込んだ。

そうしたら、もつその糞のことは忘れてしまつて、再び彼女の後を追いかけたり、倒れた木の幹から生えている茶色いものを食べたり、枯れ木の枝からわずかに生えている緑の葉を食べたりした。

時には何か緑色のものがあるので、木の芽だと思つて食べようとするところがぴよんと跳ねて逃げようとすることもある。そのまま逃げられてしまうこともあるし、そいつが逃げる方向を間違えて、彼の口の中に飛び込んでくることもある。

口の中に入ったものはそのまま食べてしまつが、それは木の葉とはまったく違う味がした。その味はなじみのないもので、好ましいとは感じられなかったが、なんであれ口の中にもものが入っているということは素晴らしいことであった。

以前は跳ねるものを追いかけて食べたりはしなかったけれど、今では少し首を伸ばして追いかけたりもする。追いかけたからといっていつでも口にできるわけではないけれど、うま口に出来た時は、多少なりとも空腹を抑えることができるのだ。

糞を食べたことは、前世の記憶中では、つまり夢の中では、不自然なことには思えなかった。臭いとも気持ち悪いとも思わなかった。むしろ、よい香りがするように思えたものだ。

仲間の糞を食べることによって大腸菌を摂取する動物がいるという。ゴキブリの一種がそうやって細菌を世代間で受け継ぐというし、コアラなども同じようなことをすると聞いた。

食糧が不足して、いままで食べなかったものを食べるようになれば、当然消化できないものまで食べてしまうだろう。しかし、大腸菌の世代交代はその共生宿主の世代交代よりもはるかに速いから、一部の大腸菌は新たな食料を消化できるように進化する可能性がある。

その場合、進化した大腸菌の含まれる糞を食べるることによって、他の個体も新種の食料を消化

できるようになるということもあり得るのではないだろうか。

もちろん、新たな食料に対応するための行動としてではなく、ふだんから、下痢になったら仲間の糞を食べるとか、あるいは、発情臭に引かれて食べるという行動が発達していた場合であるが。

ところで、恐竜は液体の尿を出さないで、鳥のように糞と一緒に尿酸の形で固体の尿を出すと聞いた。乾燥した陸上への適応という点からすると、水分の損失を抑えている鳥や恐竜の方が哺乳類より進化しているらしい。

一方、哺乳類は発情や縄張りの情報を伝えるために尿の匂いを利用してしているのだから、もしかしたら恐竜は糞の匂いでそういった情報を伝えていたのかも知れない。

ボクは追われていた。

追われて走っていた。薄暗い森の中を必死で走っていた。大きな動物がボクを追いかけていた。後ろを振り返ったりする余裕はなかったけれど、肉食恐竜がボクを追いかけていることはわかっていた。

けれどもしばらく走ると疲れてしまって、立ち止まって休まなければ息が続かなくなる。恐怖は感じながらも、少しでも追っ手を引き離れたように感じると、ボクは立ち止まって休んだ。

息が続かないのは追っ手の恐竜も同じようで、ボクよりも相手のほうがほんの少し早く息が上がるようだ。なんととっても、ボクの方は命がけなのだから、すぐ後ろに追っ手が迫っている間は休めない。

休みながらおそるおそる振り返って、追っ手の様子を窺うと、相手もこちらの様子を窺っている。また追いかけてくるかと思ったら、どうやら別の獲物を見つけたようで、違う方向に走って行ってしまった。

危険が去ってみると、群れから離れてしまったことに気づいた。群れといっても、彼女とボクの二匹だけの群れなのだが、それでも一匹だけになってしまうと随分と心細い。

それで彼女を探しながら、最後に一緒にいたあたりに戻ることにする。二匹だけの群れといっても、やはり一定の地域を縄張りにしてその範囲内でいたい餌を取っているので、やがて彼女は見つかった。

しかし、さっきの肉食恐竜が彼女を追いかけて、走り疲れたところだったようである。ボクと彼女と追っ手はだいたい同じ距離で相手を発見した。彼女は疲れていて、ボクは多少疲れが取れたところだったので、ボクの方がより恐怖に敏感だった。

ボクは恐くなって走り出し、肉食恐竜は逃げるボクを見て追いかけ出した。また逃げては、少し引き離すと休むということを繰り返している。追っ手は疲れてきて、他の獲物を探そうかという気になってくるようだ。どういっわけか、その頃になると、彼女が一匹でいるのが心細くなったのか、近づいてきて、今度は彼女が追いかけられるようになる。

そんなことを繰り返しているうちに、追っ手は疲れ果ててしまったのか、ボクたちを追いかけるのを本当にあきらめて、どこかよそに行ってしまった。

これでは、前世の記憶ではなくて夢そのものだ。だいたい化け物に追いかけられるというのは典型的な悪夢ではないか。

夢の中でもそう思ったのか、これまでは客観的

な記憶だったものが、今回は主観的な夢になっていた。

この人生の過去のことを思い出す時、ボクはその場にいるような感じで思い出すとは限らない。しばしばテレビや映画を見ているような感じがするものである。それと同じように、これまでの前世の記憶では、臨場感がないというか、主観的でないというか、他人事のような感覚だったのだ。ところが、今回の夢では本当の悪夢のように、まさに自分が追いかけられている恐怖を感じた。

可能性としては、前世の記憶を思い出しているうちに、その記憶に基づいた本当の夢をみたのだということもある得るのではないか。つまり、今回の夢は本当の夢であり、前世の記憶ではないのだ。ただ、夢の素材として前世の記憶が使われたのではないか。

一方、これまでの前世の記憶には肉食恐竜に追いかけられた場面がなく、おそらく実際の草食恐竜は頻繁に追われていただろうと考えると、そういう記憶があるはずであり、今回の夢も前世の記憶であるという可能性もまだ残されている。

もつひとつ考えられることは、両者の中間であ

る。基本的には前世の記憶として、捕食者に追いかけられるという場面があり、その記憶を夢として再生しているうちに、追いかけられるという状況から悪夢として展開されてしまったという解釈である。

この解釈はこの夢もまた前世の記憶であるという点では、ボクにとって望ましいものであるが、これまでに見た前世の記憶においても、多少なりとも夢として展開された部分があるのではないかという疑問を投げかける。

困ったことに、このうちのどれが真実かを判定する方法はありそうもない。実際どうでもよいことなのかもしれない。夢だろうが、前世の記憶だろうが、ボク以外の人間にとってはどうでもよいことなのだろう。

ボクにとってもあるいはどうでもよいことなのかもしれない。

ボクが最初に前世の記憶にこだわったのは、恐竜の研究者ですら知らないことをボクが知っているという自己満足を得たかったからではないだろうか。しかし、結局のところ、前世の記憶と思いきんでいたものも、ボクの想像する恐竜の生活に過ぎないのかも知れない。

確実なことは何も無いのだ。

ただ、今回の夢の中では恐怖感がリアルだっただけでなく、雌の恐竜である彼女の存在もリアルなものに感じられた。既に発情は終わっていたのか、彼女に対して性的な情動は感じられなかったが、群れの一員に対する穏やかな愛しさのようなものが感じられた。離れたくない、一緒にいたいという感情は、群れの構成を支配する行動遺伝子群の中の遺伝子によって、もたらされるのではないだろうか。

ボクは彼女と一緒にいて、追いかけてくるものもなく、樹には若芽がたくさん芽吹いていて、ふたりでならんでそれを食べている。ボクはゆったりとした満足感に浸っている。

これは夢だなとボクは気づく。完全な夢、願望充足の夢だ。

ふと、夢なら自分の意志で行動できるはずだと思いい、彼女の方を向いて顔を見してみる。その顔はまさに恐竜の顔であった。引き締まった脚に長い尾がとても可愛いらしい。

夢だからか、恐竜の感覚で見ているからか、目に映る姿は大きなトカゲというか本当に恐竜と

しかいいようがないのだが、そこから受けるのは、可愛らしい、愛しいという印象ばかりなのだ。こうして近くで見ると、恐竜はある意味鳥に似ている。彼女の足なんて鶏の足とそっくりだ。もっともそれはボクが鶏の足から彼女の足を想像しているからか、それともボクの見た恐竜の絵を描いた人が鶏の足を参考にしたからだろう。それとも足の鱗のようなものが化石として残っているのかも知れない。

一瞬、ボクは人間の視点で彼女を眺めていた。彼女は人間のボクよりあまり大きくないということがわかった。背の高さは人間のボクより低いくらいだ。ただ尻尾があるため、体の長さは人間よりずっと長い。全体的には馬か驢馬くらいの大きさだろう。彼女は二本足で立っていて、小さなかわいい手で、木の枝を押さえて若芽を食べている。

そして彼女の体にはキリンのような豹のような斑模様がついていた。彼女が体を動かすたびに斑模様が波打ってなまめかしい。

この夢がずっと続けばよいと思う。

ボクは目覚めていて、コンベニで買ってきた唐

揚げ弁当を食べている。人間は雑食だから、肉も穀物も食べるのだ。しかし問題なのはその速度である。ボクの場合、食事中は他のことをしないので十分もすると弁当を食べおわってしまう。一日を合計しても食事時間は一時間にもならない。

テレビを見ながら食べたりすればもつと時間がかかるが、その場合は時間は延びても快感は減ってしまう。

草食動物だったら、起きている時間のほとんど全部を食事に使えるのに。食べることは生きるうえで必要なことであると同時に、快樂でもある。必要だから快感なのかもしれないが、一日中食べる快感に浸っていられるのが草食動物なのだ。

そして群れをなす動物は群れの中にいることで安心感が得られる。人間も群れをなす動物のはずだが、人間は人間関係において安心だけでなくストレスも受ける。これはたぶん人間が周年発情だからで、常時発情しているために、常時、発情期の闘争状態にあるのだろう。

あるいは間違っているかも知れない。

草食動物は肉食動物に襲われる危険があるが、

人間と違って先のことは考えないので、襲われるかも知れないと脅えながら暮らしているわけではないだろう。追いかけられれば逃げるが、相手が見えなくなればすぐにそのことは忘れてしまつのではないか。

避けられないことに脅えながら暮らすなどというのは人間だけが行う愚行ではないのか。

彼女にはふたたび発情期が巡ってきて、ボクは彼女に求愛を続けた。彼女を見ていると愛しい気持ちが高まってきて、求愛しないではいられない。最初のうちは彼女から好ましい反応は得られなかったけれど、それでも愛しい気持ちが消えることはなく、何かの目的を持つてというよりは、その行動自体を目的として、ボクは求愛行動を続けたのだ。

やがて彼女が脚をたたんで姿勢を低くした時、なによりもボクはボクの気持ちに彼女に届いたことに喜びを覚えた。彼女が動かないでいてくれたので、ボクは彼女に触れることができた。背中の匂いを嗅いでみたり、わき腹をつついてみたりしたけれど、次に体全体をもっと彼女に接触させたくなくて、背中にのしかかるような格

好になった。お腹に彼女の体温を感じると、なんととも言えない幸せな気持ちになってきた。

ボクは両手でしっかりと彼女の背中にしがみついた。体がぶるぶると震えだして、しがみついていないと離れてしまいそうだった。震えはどんどん大きくなって、ボクはなんだか恐くなってきて、ますますしっかりと彼女の背中にしがみついた。

ふと彼女が尻尾を上げた。するとぼくのお尻の穴がむずむずと動いて伸びだして、彼女のお尻の穴とボクのお尻の穴がぴったりとくっついた。そしてお尻の穴からくすぐったいような気持ちよさが伝わってきた。それから彼女の体の暖かさがボクにじんわりと伝わってきた。ボクの体が更に激しく、一、二度揺れると、ゆっくりと震えが収まってきて、ボクは彼女の背中から離れた。ボクがつかんでいた彼女の背中にはくっきりと跡がついていた。

やがて彼女は卵を産んだ。柔らかな地面に浅い穴を掘って、そこに六個の卵を次々と産み落とした。産み終わると、彼女は卵のそばにうずくまって休んだ。ボクはしばらくその場にいたが、

彼女が動かないので、ひとりで餌を食べに出かけた。

ひとりで木の葉を食べていると、なんだかつまらないような不安なような気持ちになる。彼女はまださっきの場所にいるだろうか、戻ってみると、まだそこにいた。そして、手で卵に触ってから、その卵をくるりと回転させている。面白そうなのでボクもやってみようとしたら、彼女に怒られた。

しばらくそこにいると、安心してきてまた餌が食べたくなり、小さな木や茸の生えたところに出かけては餌を食べた。けれどもひとりであるのは不安なので、すぐに彼女のところにもどる。彼女は何も食べていないようだ。

何度か餌場と巢の間を往復していたが、口に木の枝を啜えたまま巢に戻ったら、彼女が首を伸ばしてボクの口から枝を横取りした。怒ろうとしたけれど、彼女が睨んだのでそのまま引き下がる。

そんなことを繰り返しながら、たぶん何日か過ぎた。

巢のそばにいる時に、少し離れたところで物音がした。なんだか、こわいものが居そうな気が

した。そんな時は、たいていすぐに逃げることになる。でも、お腹かが空いていたり、体が弱っていたりする時はじつと隠れていることもある。

その時、ボクは体力があったので、すぐに逃げ出した。追っ手はすぐにボクに気がついて追いかけてきた。ある程度引き離して、ふと気がつくくと彼女がいない。どうしたんだろうとしばらく待っている、また追っ手が迫ってきたので、あわてて逃げる。追いかけてこを何度かしているうちに追っ手が疲れてあきらめたよつなので、ボクは適当に餌を食べてから巢に戻った。彼女はずつと卵のそばに居たよつだ。

彼女の姿を見るとボクは安心した。

目が覚めると、喉がカラカラに渴いていた。つばを飲みこもうとしても唾が出てこない。その上、喉が動く、乾いた喉の粘膜がひび割れたかのような引きつった痛みが走った。枕元の時計を見ると、午前二時一五分。身の毛もよだつ丑三つ刻というやつだな。それから、ふと見ると隣に中年の女が寝ている。こいつは誰だ。

まだ俺は寝ぼけているに違いない。とりあえず水を飲もう。台所に行って冷蔵庫からスポー

ツ飲料のペットボトルを出して、コップに注ぎ、一気に飲み干す。コップの水を一気に飲むのはしゃっくりの止め方だったか。もう一度、今度はコップの半分くらいまで入れて、ゆっくりと飲みながら考える。

まず、俺は人間だ。なんとなくそんな当たり前のことを確認する必要があると思った。それから、俺は台所の場所と冷蔵庫の位置を知っている。たぶんここは俺の家だ。持ち家が賃貸か、マンションか一軒家かはまだ不明だが、俺の住処だという気がする。

そうすると、隣に寝ていた女は女房だろうか。そうかも知れない。ということは俺も中年かそれ以上の年ということか。これはかなり気になったので、洗面所の鏡を覗きこんだ。どう見ても中年の男だ。四十か五十か。見覚えのある顔だが、自分の顔だという確信は持てない。洗面所まで来たついでに、便所によって小便をする。結構溜まっていたので、尿意で目が覚めたのかも知れない。

水を飲んで小便をしたら落ち着いた。「身の毛もよだつ丑三つ刻」じゃなくて、「草木も眠る丑三つ刻」が正しいと気づいた。やはり寝ぼけて

いたらしい。寝よつ、朝になってしゃっきりと目が覚めればおかしなことなんて何一つないことがわかるだろう。

何か小さな音がすると思ったら、卵の殻が割れて中から小さな生き物が出てきた。そいつはしばらく震えながら手足をぎこちなく動かしていたが、やがて何かを探しはじめ、彼女の体に触れると背中によじ登りはじめた。彼女もそれを止めようとはしない。背中に上ったそいつはそこで彼女のウロコに両手でしがみついてじっと動かなくなった。

しばらくすると、もう一匹が卵から孵って、また彼女の背中に登って行った。そしてさらにもう一匹が背中に登ると、彼女は立ち上がって出かけてしまった。ボクも一緒に行こうかと思っただが、なんだか残りの卵が気になって、しばらくその場に残っていた。

見ているとまた一つの卵の殻が割れて、中から小さな生き物が出てきた。そしてそいつはこっちに向かつてよたよたと歩いてくると、ボクの体によじ登ってきた。残りの卵から孵ったやつらも同じようにボクの体によじ登り、残った卵

がなくなったので、ボクは彼女が居そうな餌場まで走って行った。

彼女がいるのをみつけてほっとして小さな木の葉を食べていると、何かが背中からぼとりと落ちた。ぼとり、ぼとりと続けて落ちて、よたよた歩きながらその辺の葉を食べようとしますが、どうやらうまく食べられないようだ。

しばらく辺りを這い回っていたが、やがてボクの落とした糞を見つけるとその中に残っていた未消化の葉を食べはじめた。柔らかくて食べやすいようだ。

子供の頃は夜に夢を見るのが楽しみだったし、どんな夢を見たのかもよく覚えていて友達に話したりもしたのだが、勤めるようになってからは朝の貴重な時間に夢を思い出したりする余裕はなかった。目覚まし時計の音で強制的に起こされ、それからは分刻み、秒刻みで入社までの時間を過ごすのだから、夢のことなど気にしている暇はない。

会社を定年退職してから見つけた仕事は、馬鹿みたいに時給の安い警備員で、それも半日だけの仕事だったから収入はたかが知れたものだが、

日本という国は無職の人間に厳しいから、身分を確保するためだけでも働かなくてはならない。

閑職といえば閑職なので、本を読んだり、そう、夢のことを思い出したりする時間はたっぷりある。

楽しい思い出だつて少なくないのに、夢に見るのは後悔していることばかりで、ありふれた話だが、試験や卒論のことばかりだ。卒論がいつまでも書き上がらないで、この現実の年齢になつても仕事の傍ら卒論を書きつづけているという夢まである。

そんな中で、時々、子供の頃に見た夢の続きを見ることがある。実際は夢の続きではなくて、「子供のころに見た夢の続き」という設定の夢を見ているだけなのかもしれない。子供のころの友達の顔さえはつきりとは思いつけないのに、夢などをそんなにはつきり覚えているはずがないのである。

それでもそんな夢をみると妙に懐かしい気持ちになる。

子どもたちは常に足をせわしなく動き回り、あちこちに広がって目が届かないほど遠くまで

行きそうになる。それでいて、ひとりが何かに驚いたりすると、全員一斉に背中に登ってくる。それから危険がないことに気づいておずおずと首を伸ばしてから、いきなり勢いよく背中を滑りおりる。

それでも本当の危険が迫った時、肉食恐竜が餌を求めて徘徊してきた時は、ボクも逃げなければならぬ。子どもたちを守らなければならぬ。子どもたちを逃げなければならぬ。自分が逃げなければならぬ。という気持ちと、自分が逃げなければならぬ。という気持ちの板挟みになって、最後のひとりが背中に乗るまで待っていられないこともある。だからだんだん子どもたちの数は減って、追いかけられた時も自分の脚で走れるくらいまで大きくなったのは娘が一人に息子がひとりだけだった。

それでも多すぎるくらいで、もともと広くない餌場にひよろひよろと元気なく伸びた少ない樹木と、数はあるけれどおいしくない茸に対して、成長してますますたくさん食べるようになった子どもたちとボクたちはしばしば飢えを感じるようになってきた。

だんだん子どもたちが邪魔になってきて、めずらしくおいしい木の芽を見付けた時に、首を伸

ばして横取りする生意気なやつに怒りを覚えていきなり蹴りつけた。

それでも娘たちはいとおしく、まだまだ発情する年齢にはなっていないけれど、ボクには娘たちが彼女と同じ種類の生物だということがわかっていた。

一日中夢の話ばかりしている奴がいる。老人ホームというところは学校や刑務所と同じで、嫌な奴だろうと同じところに来てしまった以上は毎日付き合って行かなければならない。

テレビを見ているうちはまだいいが、話が始めると昔の自慢話や家族への愚痴などが次から次へと際限もなく出てきて、ひとが聞いていようとしまいとおかまいなしにいつまでも語りつづける。

まあそんな中では夢の話など害のない方だと言えるだろう。けれども、やがてそれはただの夢ではなくて、前世だなどと言いはじめるとそうも言っていられなくなる。前世だって夢だって大した違いはないけれど、前世の話が出ると必然的に来世の話になり、やれ反省しろだの行いを正せだのということになる。しかし、転生が

公平に行われるものなら、人生の最後にちょっとくらい反省したところでどうにかなるものではないだろう。

そうは言ってもこの年になると、そして年に何人かずつ周りの人間が死んでいくような所にいると、死後の世界というものに多少は期待をかけたくなってくるのかも知れない。私自身はそんなに熱心に信じる気にはなれないが、だからといって無下に否定したりするつもりもない。ただ、死後のためにいまさらああしろ、こうしろと言われると、それは鬱陶しい。

私自身はあまり夢を見ないようだ。それとも夢の内容を覚えているだけの記憶力がもう残っていないのかも知れない。朝起きた時になんとか不思議な気分が残っていたり、怒りや悲しみなどの感情の高まりを覚えたりすることはあるのだが、具体的にどんな夢を見たのかそのストーリーを覚えていることはほとんどない。原因不明の感情に戸惑うばかりである。

彼女が再び卵を生んだ。

けれども卵は孵らなかつた。子どもたちが大きくなつたので、相対的に彼女の食料が少なくな

り、十分な栄養を持った卵を生めなかったからか、それとも気候が寒くなってきたせいで孵化のための温度が足りなかったのか。

彼女もボクも卵を抱かないので、気温が下がる
と孵化率が下がってしまう。せめてボクが卵を
抱けば良いのだけれど、ボクが卵に近づくと彼
女が怒って攻撃してくるので、それも出来ない。

彼女はいつまでも孵らない卵のそばで見張りを続けるので、ボクは彼女のために木の杖や茸を噛み千切っては、両手に抱えて持ち帰ってあげた。

やがて彼女も諦めがついたのか、卵のそばを離れて餌場に戻ってきたので、ボクは次の餌場を探しに移動するべき時だと判断した。火山でもあって地熱の高い土地か、気温の高い南の土地に移るべきだろう。

どうしてそんな知識をボクが持っているのか、一瞬不思議に思った。それからボクは人間でこれは前世の記憶なのだと気がついた。それでなんとなく納得したのだけれど、何かおかしいような気もした。

そんなことより大切なのはこの小さな群れを率いて移動すること。そして食糧が不足し気温

の低いこの絶滅期を生き延びること。

前世の記憶がどこに保存されているかということは結構重要な問題である。ボクが思うにはそれは空間ではないだろうか。普通の記憶がどこに保存されているかというところ、ボクの理解できる範囲では、それはまず特定の物質ではない。だから、人の脳から記憶物質を取り出して、それを他の人に注射すると記憶が転移されるというようなことはない。ただ、プラナリアでは学習結果が何らかの物質になっていて、記憶を転移させることが可能だと聞いた。しかしそのことはおそらく脊椎動物では成り立たないであろう。人間の記憶は神経回路に保存されるという。それはいつても何かを見たり聞いたりするたびに神経回路が生成されるわけもなく、網の目のように相互に接続した神経回路の特定の部分が特定の順序で刺激されることが記憶になっているらしい。ボクの理解によれば、それはドミノ倒しの倒れ方のパターンがひとつの記憶になるようなものだろう。

そこでパターンの存在するところ、パターンの保存されるところはどこかということが問題と

なる。それが空間そのものではないかとボクは思うのだ。物理の授業でコンデンサに蓄えられるエネルギーは、両極の間の空間に蓄えられると学んだことがヒントになって思いついたのだが、ボクとしては結構いいところを突いているのではないかと思っている。

そう考えれば、現に体験している前世の記憶という現象をつまく説明できると思っているのである。超ひも理論とかいう物理学の理論によれば、空間の次元数は十以上もあるらしいから、記憶くらは余っている次元にいくらでも保存できるだろう。

もしかしたら、こんなとき恐竜は本能によって正しい行動をすることが出来るのかも知れないが、いまのボクの考え方はまるきり人間のものであって、それゆえにどう行動してよいかかわらない。

できれば他の草食恐竜がいなくて、食べ物十分ある土地に住みたい。相手が草食だとしても、恐竜と争うのは考えただけでも恐ろしい。肉食恐竜が相手ならば、争わずに逃げればよいのだが、同じ植物を食べる草食恐竜と縄張りを争う

時には逃げるわけにはいかないからである。

結局川に沿って下ることにした。水を確保しながら移動するには、川沿いに進むのがよいと思っただからだ。川が道標になるから、同じところをぐるぐる回る心配もない。下ることに決めたのは、単に、そばを流れている川が細くて、上流に向かったのではすぐに源に行き着いてしまうと思っただからである。

考え方は人間だが、鳴声は恐竜のものである。そして群れを移動させようと思っただけで声を出すと、彼女も子どもたちも後をついてくるのはどうも都合がよすぎる。やはり、夢ではないかとも思うのだが、夢にしては長く続きすぎているような気がする。

しかしそんなことはどうでもいい。ボクにとっただけはこの生以外の生というものも、もはや微妙にしか思い出せないし、重要でもないのだ。

また恐竜になった夢を見たけれど、お母さんには黙っていてよと思う。お母さんはボクが夢の話をするのを嫌がるし、恐竜も嫌いなんだ。もっと現実を目を向けなさいって言われちゃう。お母さんのお爺ちゃんが、恐竜好きで家には恐竜の

模型が飾ってあったんだけど、お母さんはその模型が恐くてお爺ちゃんの家に行くのが嫌だったんだって。

お爺ちゃんは模型だけじゃなくて、本物の恐竜の化石を見つけたこともあるんだって。それは家には置いてなくて、博物館に預けてあるんだ。ボクも博物館に見に行ったんだけど、すごくちっちゃな骨だったんでがっかりした。

でも、お爺ちゃんがその化石を見付けたのは恐竜の夢を見たからなんだって。何度も何度も恐竜の夢を見たんだって。ボクももう五回くらいは恐竜になった夢を見てるんだけど、ボクにも恐竜の化石が見つけれられるかな。どうせなら大きな骨をみつきたいな。

あれは草原だったのではないか。夢の中で恐竜になったボクが追いかけて走っていた時、走りの邪魔をする木々は存在しなかったように思う。ところが、恐竜の生きていた時代には草原はまだ存在しなかったということの本で読んだ。もっとも恐竜の本もたくさんあって、新しい本で古い説が否定されたりしているから、本に書いてあることがいつまでも正しいとは限らない。

それにどうやら恐竜の嗅覚はあまり鋭くなかったらしい。哺乳類が恐竜に追われて夜行性の生活を始めた結果、視覚を補うために発達させたのが嗅覚だというのが、そう言われると、恐竜に近いといわれる鳥類はあまり嗅覚が発達していないようだ。鳥類の多くは視覚的に求愛をする。そうだとすれば、やはり前世の記憶などではないということになる。無理に何かの記憶と考えるならば、この地球の恐竜ではなく、どこか別の惑星で育った恐竜に似た生き物の記憶なのかも知れない。その場合、過去とは限らず、この宇宙のどこか遠いところで今起っていることを夢に見ているということも考えられる。

しかしどうでもいいことだ。まったくどうでもいい。

彼女と別れた。

雌よりも雄のほうが成熟が早かったのだ。つまり息子が成熟してしまって、群れの中で唯一の成熟した雌である彼女に求愛を始めたわけだ。

本来なら息子と戦ってでも彼女を確保しなければならぬのだが、この絶滅しかかっている群れの中で争って傷つけあう危険は冒せなかつ

た。というより、息子が怖くて戦えなかったという方が正しいのか。

息子が挑戦して来そうになった時、ちょうど川に浅瀬があったので、私は娘たちを連れて逃げるように川を渡り、そのまま彼女と別れたのだ。彼女と別れたのは悲しかったけれど、なんだかこの頃、娘たちがやけに愛おしく思える。人間にとつては娘とのセックスは重大なタブーだが、恐竜にとつてはそうではない。ましてや絶滅期とあれば、きわめて正当な行為と言えるだろう。もっとも、タブーに反したからとつて、責めたてるマスコミも世間もここにはないのだから、どちらにしても気にすることはないのだが。

娘たちは私の気持ちを知っているはずもないが、少なくとも群れのリーダーとしてのボクを認めてくれている。その点ではなんとか息子に負けずすんだということのようだ。

しかし当面の問題は食料の確保である。

南がどちらかというのはもちろん太陽の昇る方向を見ればわかるのだが、北半球にいるとは限らないので注意が必要だ。それに空はほとんどの場合雲に覆われているから、直接太陽を見

ることはできない。それでも明るい方向から、北半球にいたことがわかったので、南に向かうことにする。

それと同時に、きのこや草の根、昆虫やミミズなどを食べるようにする。川では魚を捕まえる。幸いにも草食動物が昆虫や魚を食べた場合は、肉食動物が草を食べた場合よりずっと消化しやすい。

彼女がいた時は、どうも彼女に頼っていたところがあつたようで、人間としての知識を生かそうとはしなかったが、娘たちは私だけが頼りなのだと思うと、責任感を感じるのである。

一度は手で石を掴んで投げてみようとしたが、さすがに恐竜の器用さでは無理だったようだ。これでは火を熾すことや道具を使うことも無理だろう。

それでも食物の幅が広がった結果、飢えはしのぎやすくなった。娘たちもだんだん太ってきて、最初の発情も間近に思えた。なんとかこの世界で生きていけそうな気がしてきた。